

『カナダはひとつ』

ディーフェンベーカー回顧録 (第2部)



これは一九五七年から一九六三年までカナダ首相の座にあって権利憲章の成立など、数々の業績を残したディーフェンベーカーの自叙伝三部作の第二部。第一部が首相になる以前のことをつづつていのに対し、第二部は首相時代の政策やできごとが中心になっている。第一部同様、内容はディーフェンベーカーの性格そのままに直截で断定的、パンチがきいていて党派的だ。

一部引用すると――。

「私が内閣に加えた諸君は、私を指導者にさせまいとあれこれ長年にわたって工作してきた連中だ。私は彼らの昔の行動は問題にしないことにした。内閣に入れば、彼らもたくらみをしなくなるだろうと、うかつにも信じたからだ」

「私は生涯の大半を、無知ゆえに選挙のたびに敗戦にいくらかの慰めを見出し、ているような、保守党内のあまり開けない連中と論争することに費やした」



「私の話すところがどこであれ、すべてのカナダ人に話しかけているというのが私の考えだ。全国津々浦々で、私が達成したいカナダ像を描く……。ケベックではこう述べた――『私が約束できるのは、諸君の権利が尊重されるだろう、ということだけだ。諸君はしばしば――あまりにしばしば――平等を否定されてきた。私に関する限り、こういうことはなくなるだろう。』私は『皆さんは素晴らしい人たちだ』なんて言うためにケベックに行ったのではない……。もしバンクーバーやカルガリー、ウイニペグ、トロントあるいはハリファックスで『皆さんは世界で最も素晴らしい人たちだ』なんて言うものなら、聴衆がどういうことをするのか私には分っていた。サイフをもっている人は、まだちゃんとそこにあるかどうか、一人残らず（ポケットに）手をのばすだろう、とね。」

一九六一年六月に訪加した池田首相との夕食会で――。

「彼（池田首相）は、話しながら目の前の皿をじっと見ていた。どの皿も、すみに小麦の束が金彫りされていた。（ちよとど対日小麦輸出の拡大について話していたので）彼はこの妙な偶然性にふれた。首相が皿を手にしてひっくり返すと、

『メイド・イン・ジャパン』とあった。……首相ははじめ、ムツとしたが、私もはじめて知ったんだと言うと、彼の態度は変わった。われわれの話合いに、運命というものが入りこんできた。彼が考えたかどうか分らない。ただ、その瞬間からカナダの対日小麦貿易に熱意を見せたのは明らかである。」

また、池田首相が、中国とソ連は国民の伝統や気質が違うため、同盟を長期間続けることはなからう、中国が原爆を開発したら、両共産主義巨大国間の分裂は永久化するかもしれない、と見通しを述べたことにふれ、その洞察力に感心している。

回顧録の第三部は、一九六二、六三、六五年の総選挙を中心に、六七年にディーフェンベーカーが保守党党首を退任するまでのできごとを記している。第三部は十月に刊行された。

ディーフェンベーカー氏は現在八十二才。下院議員として今なお活躍している。

☆ ☆ ☆

ディーフェンベーカー首相が一九六二年に来日した折りに随行したゴラム現駐日公使（当時は、六年間の日本勤務を終えて外務省日本担当の職にあった）は、そのときの思い出をこう述べている。

「飛行機の出発がかなり遅れてしまい、晩に到着するはずのものが、翌朝になってしまった。おかげでとてもきついスケジュールになったが、訪問自体は極めてうまくいき、首相夫妻も心ゆくまで楽しんでた。

ディーフェンベーカー首相は、日本へ向かう飛行機の中で、空港へ着いたら日本語で簡単なあいさつをしたいと希望した。私が適当な語句を二つ三つ首相に

教えることになった。ローマ字で書いて首相に発音のしかたなどを教えたが、中々のできた。ところが、飛行機が遅れたために首相はひどく疲れていて、メガネをどこかにしまい忘れてしまった。そこであいさつをする段になって、私がカードに書いてあげたローマ字がよく読めず、発音も練習のときほどうまくなかった。しかし空港に迎えにきて下さった皆さんに私が事情を説明すると、皆さんも納得し、温かい拍手をしてくれた。

訪問中、私は首相の記憶力に舌をまいたことがある。首相と随員は、太平洋上空の飛行機の中で、東京でやる主要演説を一生懸命用意していたところで、首相は随員すべてと同行の記者に演説のしめくりの部分についてアイデアを求めた。ひとつ選ばれたので、ほかのアイデアは全部捨てられるものだと私は思っていた。ところが、驚くまいことか、大阪で松下の工場を訪れたり、京都で夕食会があったりするとき、原稿も何もない即興のあいさつの中で、ちゃんと前述のアイデアをかわるがわる引用するではないか。とても疲れているときだけに、首相の記憶力には本当に感心させられた。首相は日頃から非常に日本に関心をもっていた。日加関係会議の設立など、現在の両国関係で彼の関心や政策から生れたものも多い。

池田首相との最後の会議が終わったあと、池田首相は壁からすばらしい富士山の絵をはずし、裏に署名してディーフェンベーカー首相に贈った。ディーフェンベーカー首相はこの絵をとても大事にして、自分のオフィスに飾って訪問者があるとよくそれを見せていた。」